慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ハイマン・カブリン編著『明治勞働運動史の一齣』：高野房太郎の生涯と思想
Sub Title	Hyman Kublin (ed.) : Fusataro Takano and Meiji labour movement
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1960
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.33, No.1 (1960. 1) ,p.109- 113
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19600115-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ハイマン・カブリン編著

『明治勞働運動史の一齣』

——高野房太郎の生涯と思想——

本書の編著者ハイマン・カブリン（Hyman Kublin）教授（Brooklin College 歴史學部教授）については、"Katayama Sen: the Birth of a Bolshevik"（『社會科學討究』第一卷第二號）、「高野房太郎——一勞働運動指導者の生涯と思想——」（『國家學會雜誌』第七十卷第七號）、「幸德秋水の一米人アナキストへの書簡」（『社會科學研究』第九卷第一號）などの筆者として、わが國のこの方面の研究者のあいだではあまねく知られている。カブリン教授は一九四七年にハーヴァード大學を卒業したが、その卒業論文以來、日本近代史の研究を手がけられ、今日では日本勞働運動史の秀れた研究家として國際的にも知られている。(1)

本書は、教授がさきに發表された「高野房太郎——一勞働運動者の生涯と思想——」を支柱にして、大河内一男教授の「勞働運動史上における高野房太郎」および和文・英文による「高野房太郎文集」からなる。(2)

明治三十年四月六日、職工義勇會の主催で神田において勞働者をあつめ演説會が開かれた。聽衆は、佐久間貞一、高野房太郎その他の演説をきき、有名な「職工諸君に寄す」というビラの配布をうけた。この日をもつて日本の勞働組合運動の生誕の日と考えられているが、この職工義勇會は高野等によつて組織されたものであり、「職工諸君に寄す」は高野の筆になるものである。高野房太郎はこのように、わが國における勞働組合運動の一大先覺者であつたにもかかわらず、專門研究家のあいだにおいてすら重きをおかれず、「明治後期の數多くの社會改革者のうち、高野房太郎ほど後世の人から冷遇されている者はない」（本書五二頁）のである。したがつて本書は埋もれた先覺者高野房太郎にわれわれの目を注がせ、彼の眞價を教示してくれた貴重な勞作であるといわねばならない。

（1）カブリン教授のこれまでの業績については入交好脩教授の「あとがき」にくわしい。そこではカブリン教授に"The Japanese Socialists and Russo-Japanese War""Bibliography of the Writings of Sen Katayama in Western Language"および"The Origins of Japanese Socialist Tradition"等の論文があることが記されている。

（2）さらに詳しく記せば「口繪寫眞解説」と「あとがき——上梓に至るまでの經緯について——」が入交教授によつて執筆され、「高野房太郎年譜」とカブリン教授の「序」がある。

一　高野房太郎をはじめて歴史の中に正しく位置づけした、ということが本書のもつ第一の意義である。

高野は明治の王政復古が行われた一八六八年に長崎に生れた。十歳のとき彼の家族は東京に移り父親は運送業や宿屋をはじめた。しかし二年後に父の死にあい、さらに二年後（一八八二年）には旅館をしていた家を火災で失い、高野は横濱の伯父の店で働きながら横濱商業學校に通つた。一八八五年伯父の死にあつた彼は、翌年アメリカへ渡航する。

一八八九年十月五日、高野は讀賣新聞に最初の論文をのせたが、以後しばしばアメリカの風物、勞働・社會問題等について書き送つた。一八九〇年、高野は城常太郎、澤田半之助等と共にサンフランシスコ在住者で職工義勇會を組織したが、これは會員に勞働問題や事件に親しませ、彼等自身がやがて日本に歸國したとき勞働運動を發足させるのに役立たせるということにあつた。高野は一八九五年に歸國し Japan Advertiser の記者となつたが、この歸國するまでの數年間にA・F・L（American Federation of Labour）に接觸し、その指導者 Samuel Gompers（1850—1924）と交わり、感化をうけていたことを忘れてはならない。歸國した彼は二年後（一八九七年三月頃）「職工諸君に寄す」を書き、職工義勇會を再建したことはすでにのべた。七月には勞働組合期成會の幹事となり勞組結成の敎宣のため全國の重要都市を講演してまわつた。その後、消費組合を設立したり（わが國で最初のこと）、工場法の通過をはかる運動に參加したが、一九〇〇年二月に治安警察法が通過したとき、この法律と爭うことを無益と考えた高野は、當時衰退しつつあつた組合運動から身をひき、ふたたび Advertiser 紙の記者となり支那にわたり、一九〇四年三月三十六歳の若さでその生涯を閉じた。

アメリカに十年の長きにわたつて留まり、職工義勇會を組織して勞働問題を勉强した高野は、またA・F・Lの組織や Samuel Gompers と交渉をもち勞働問題の實際にふれていた。したがつて日本における工業および勞働關係の諸問題については「日本勞働運動の初期の主要な指導者たちの多くとは違つて、すくなくとも高野については、『井の中の蛙』という諺は當てはまらなかつた」（本書二五頁）のである。彼は工業および勞働關係の諸問題について均衡と見透しのついたセンスをもつていたが、この「彼の思想に及ぼしたアメリカの根本的な影響とは、ほかならぬ工業化とそれが文明の進歩をもたらす可能性とを彼が深く認識していた」（本書二六頁）ことである。高野は（當時の西歐を訪ねた日本人と同じく）「社會的・經濟的制度としての資本主義に對する敵對者ではなかつた」（本書二七頁）。なぜならば、アメリカでは機械の廣汎な使用によつて

勞働者の地位はひきあげられ、夢想だにしなかつた物質的知的利益を勞働者にもたらしていたのだから。彼は、目先の利潤に貪欲な資本家には激しい非難をあびせるが、資本主義制度は人類の福祉增進に寄與するものとしてこれを信頼し辯護した。

かつて實在もしなかつた牧歌的な時代と生活樣式に哀惜をよせる浪漫的な哲學者とちがつて、高野はおしげもなく過去に背をむけた。彼は彼の敬愛する Gompers と同じく實用主義者であつた。その點高野は Gompers に似ていた。しかし、Gompers は「思想家」や「インテリ」に不信を抱いていたが、高野は逆にそれらの人々の助力をねがつていた。それは、政治的自由をもち教育の普及しているアメリカでさえ勞組の組織化がいかに困難であるかをみた高野は Gompers の方式が直ちに日本で適用できないことを看取したからであつた。高野は、日本の勞働者階級の改善にとつて最大の障害は、日本社會の各階級を通じて廣く見られる勞働問題についての無知にこそあると確信していたので、彼は「教育」の必要を說き、インテリや思想家の助力を期待したのである。

一八九七年に職工義勇會は再建されたが、これまでの定說によると會の創立者たちはこの頃、日本に組織的な勞働運動を開始するための諸條件はすでに「熟している」との結論に達したとなつている。しかしカブリン教授は、この頃は勞働組合運動を發足させるに不利な條件のもとにあつたとされる。高野は勞働運動の諸條件が「熟している」かどうかということよりも「劣惡な勞働條件の匡正」を必要としていることの明瞭な事態そのものに關心があつたのだ、というのが教授の見解である。「劣惡な勞働條件の匡正」が目的の職工義勇會であるから本質的には社會改良主義者の集りであり、したがつて、資本主義制度をもつて本來邪惡なものとは考えていなかつた片山潛、島田三郎、鈴木純一郎、佐久間貞一という名聲と才能を有する人々が惜しみなく助力をあたえたのであつた。

ついで出來た勞働組合期成會は勞働組合そのものではなく、勞組の組織を促進する團體であり、勞働問題についての教育を勞働者にあたえ、オルグを養成する學校であつた。教育に力點をおいたことは、組合を組織するにあたつて最も主要な問題は勞働者を彼ら自身の無知という束縛から解放することにある、という高野の信念のあらわれであつた。ともあれ勞働組合期成會の盡力でその年の末に鐵工組合が結成され、年をこして日鐵機關手の組織、印刷工の組織その他が誕生した。かくて約二萬名の勞働者が組織され、表面的には勝利を記錄しつつあつた。

しかし勞働組合運動も數世紀にわたる傳統や慣習や考え方に束縛されている勞働者を覺醒させるのは困難であつた。勞働者は組合運動に一錢でも寄附することは浪費であると考え、使用者に對して正

當な生産物の頒け前を要求することはなにか邪しまな企てだと考えていた。いわんや勞働者の連帶感も、個々の勞組の枠の外まで及ばず、勞働組合期成會がこれを統合しようとすることは、ほとんど名目的なものになつていつた。また「思想家」たちのあいだでも勞働組合にたいする樣々な考えが擡頭して相爭う分派に分裂しつつあつた。高野自身は、勞働者の組織が十分でなくまた政府の强力な腕がたえずわれわれの組織を押し潰そうとしているときに組織勞働者が激情的ないし過激な發言を弄することは愚の骨頂と考えていた。高野にとつては勞働者の眼前の條件を改善することだけに關心をよせていた。これに對してたとえば『勞働世界』の主筆で鐵工組合幹事の片山潛は勞働運動に强力な影響力を行使してそれを社會主義の方向に轉換する努力を行える地位にあつた。

以上は勞働者とその指導者内部の問題であるが、これに外からは警察の壓力が加わり、さらに一九〇〇年には治安警察法の出現という致命的な打擊が加えられた。高野は運動の鬪士ではあつたが、殉教者になることは無意味であると考えた。ここで彼は運動から退くのである。

二　本書がもつ第二の意義は、和文十篇、英文二十四篇からなる高野の論文を收錄してあることである。和文の資料すら今日まで多く知られていなかつたが、新資料十篇がわれわれの共有財産の中に加えられたことは何といつても喜ばしい。加うるに American Federationist, Social Economist その他に發表した貴重な英文資料をわれわれも利用できることは感謝の外ない。これらの資料はカブリン教授自身、論文中で縱横に利用されておるから改めてここに紹介するのを避ける。

三　本書がわれわれに教える第三點は、日本近代史研究とはかぎらず、およそあらゆる研究において尊重されなくてはならない研究態度であり、研究方法についてである。今假りに日本近代史研究だけに限り、さらに勞働運動史研究分野に極限してみても、わが國の研究者のあいだには一つの Pattern があつてその Pattern を破るには非常な勇氣がいるということである。この Pattern とは、勞働運動史研究の分野でいえば、一切の思想や現象を階級鬪爭史觀の見地からみるということである。この「史觀」に無理押して押込み、はみ出したものが、枠にはまつたものの何倍、何十倍となくあつてもすててかえりみないという態度である。

高野房太郎が資本主義制度を肯定していたり、職工義勇會に馳せ參じた良心的な自由主義者も一人として資本主義制度を打倒しようと考えていなかつたり、高野が一切の階級鬪爭、政治鬪爭を避けたこと等が事實であつてみれば、高野およびその支持者が今日まで埋もれていたのも無理からぬことである。カブリン教授が廣汎な資料

によつて高野等の考え方や運動が當時にあつては最善の方法であることを實證されても、今日の階級鬪爭史觀にたつ學者は「事實に反する獨善」としてしりぞけようとする。しかしどちらが獨善であるかをきめるものとしても多量の和文・英文資料は決定的な材料となるだろう。

最後に大河内一男教授の小論に簡單にふれると、大河内教授もこの小論でカブリン教授の「高野房太郎觀」にまつたく同調されている。ただ殘念でならないのは、同じ結論に達せられたとはいえ、カブリン教授の論文におくれること三年餘であるということである。日本の學者は歐米の學者に露拂いをしてもらわなくては物も言えないような印象をうけるのが筆者だけであれば幸甚である。（有斐閣七〇〇圓）

（中村勝範）